

もし世の中、もし若宮が春宮に
お立ちになるならば、其爲には
御代が改まらなければならぬ
ので、不吉な豫言ですが、その頃
まで、尼君も達者でいらつしやる
やうに。

さればこそさま／＼、それだか
ら悲しみも喜びもそれ／＼、他に
類のない運命なのです。

宮より疾く、春宮から明石女御
が早く来られるやうにとのお召
があるのです。

御息所は、明石女御は容易にお
暇の出ないのに懲りて、かうい
ふ機会にもう暫く里に居りたく
思召す。皇子をお生みになつた
方を御息所と申す。
斯くためらひがたく、「かく」は
「宮より疾く参り給ふべき云々」
を指して、いふ。こんな御催促
があつて、じつともして居られ
ない（いそがしい）御身だから、
此の際養生して参内なさるがよ
からう。

思ふさまにかなひ果て、思ひ通
りに中宮におなりなさる迄は、お
目にかげなくおすべからず、お
世は無常なもので、すから、氣が
り故、今お目にかけます。
存で處理し得るやうにならば、
前に私が死んでも致しませんら
臨終の折に必ずしもお目に懸ら
れる身でもございませぬから、
まだ正念で居ります間に些細な
事もお耳に入れておかねばなら
ぬと存じます。これを見苦しい下
筆蹟ですが、これも御覽下さ
い。

このうちの事どもは、この願文
に書いてある願解きは果して下
さい。かばかりと、あなたの將來も見
届けた事ですから。

り給ひてむ。明石姫君女御の君も、いとあはれになむ思し出でつつ聞え
させ給ふめる。源氏院も、事のついでに、『もし世の中思ふやうな
らば、ゆゆしきかねごとなれど、尼君その程までながらへ給は
なむ』と宣ふめりき。源氏は或は若宮の御即位を考へて仰しやるのかの意
又うちゑみて、馬いでや、さればこそさま／＼、ためしなき宿世
にこそ侍れ』とて喜ぶ。入道からの文箱は明石上が携へて姫君の所へ送られた
宮より疾く参り給ふべき由のみあれば、紫それも御尤な事です、斯くおぼしたる、こ
とわりなり。若宮もお生れになつた事故どんなに待遠しがつていらつしやるでせう
「らむ」と紫の上も宣ひて、若宮忍びて参らせ奉らむの御心遣
ひし給ふ。御息所は、御暇の心やすからぬに懲り給ひて、斯か
るついでに、暫しあらまほしくおぼしたる。年のゆかないのにお産といふ怖ろしい
事なまつたのだから、
怖ろしき事をし給へれば、すこし面瘦せほそりて、いみじく
なまめかしき御さまし給へり。明石上斯くためらひがたくおぼす
る程、つくろひ給ひてこそは』など、御方などは心苦しがり聞

え給ふを、源氏おとどは、「かやうに面瘦せて見え奉り給はむも、な
か／＼あはれなるべきわざなり」など宣ふ。紫上などが自分の御殿に歸られた夕方
給ひぬる夕つがた、入道からの文箱しめやかなるに、御方、姫君のお側にお前に参り給ひて、
この文箱聞え知らせ給ふ。明石上思ふさまにかなひ果てさせ給ふ
までは、この文箱を取隠して置きて侍るべけれど、世の中定めがたければ、
うしろめたさになむ。何事をも、御心とおぼし數まへざらむこ
なた、ともかくもはかなくなり侍りなば、必ずしも今はの閉ぢ
めを御覽ぜらるべき身にも侍らねば、なほ現心失せず侍る世に
なむ、はかなき事をも聞えさせおくべく侍りけると、思ひ侍り
て、入道の文の事むつかしく怪しき跡なれど、これも御覽ぜよ。この御くわ
んもんは、ぶ近き御厨子などに置かせ給ひて、必ずさるべからむ
折に御覽じて、このうちの事どもはせさせ給へ。疎き人にはな
漏らさせ給ひそ。かばかりと見奉りおきつれば、明石上もみづからも、
世を背きはべりなむと思ふ給へなりゆけば、よろづ心のどかに
氣ぜはしく思はれます

いとありがたく、世にも珍しい御親切の程も分りましたから、私よりも思ひます。長生きして戴き、もとより御身に。私はずとく、あなたにお附添申して居るのも、斟酌せねばならぬ身分なので、お任せ申しておいたのです。最初、世間並に考へて居りますが、これ程までには親切にして下さるまいと思つて居りました。今はもう全く安心致しました。

斯く睦まじかるべき。明石上は娘のお前に於ても始終長まつてゐて、無闇に遠慮がちの體である。この文の言葉、入道の手紙の文、言はいやに堅苦しくなつかしみのないものであるが、それをまた(やばな)陸奥紙の古くなつて黄ばんだ厚ぼつたの五六枚に深く薫きしめて書いてある。

對に渡し聞え、紫上がつれてお歸りになりました。

此方に渡りてこそ、紫上がこちらに来てお世話なさるが宜しからう。いと、たて、まあいやな思ひやりのないお言葉でございますこと。

まして男は、まして男のお子はいくら高貴な方でも、どこにおつれ申しても仔細のない事なごです。から、冗談にもそんな隔てがましい事は、やかましく仰しやいます。な。御中どもにまかせて、若宮の事はあなたの方の間に任せて構はず。さかしらなど、宣ふこそ、明石上が「さかしら」が聞きませ給ひ、そといはれた詞を受けていふ。

も覺え侍らず。對紫上の御思をの上の御心、おろそかに思ひ聞えさせ給ふな。いとありがたくものし給ふ深き御氣色を見侍れば、身にはこよなくまさりて、長き御世にもあらなむとぞ思ひ侍る。もとより御身に添ひ聞えさせむにつけても、つつましき身の程に侍れば、譲り聞えそめ侍りにしを、いと斯うしも物し給はじとなむ年頃はなほ世の常に思ふ給へ渡り侍りつる。今は來し方行く先、うしろやすく思ひなりにて侍り」など、いと多く聞え給ふ。涙女房はみて聞きおはす。斯く睦まじかるべきお前にも、常に打解けぬさまし給ひて、わりなく物づつみし。たるさまなり。この文の言葉、いと、たてこそはく憎げなるさまを、陸奥紙にて、年經にければ、黄ばみ厚肥えたる五六枚に、さすがに香かうにいと深くしみたるに書き給へり。いとあはれとおぼして、御額髪のやうく濡れゆく御そば目、あてになまめかし。院源氏は女三宮の所に居られたがは姫宮の御方におはしけるを、中の御障子よりふと渡り給へ

入道の文箱を、えしも引隠さで、御几帳をすこし引寄せて、みづからは、はた隠れ給へり。源「若宮は驚き給へりや。時の間も戀しきわざなりけり」と聞え給へば、御息所はいらへも聞え給はねば、御方、「對に渡し聞え給ひつ」と聞え給ふ。源「いと怪しや。あなたにこの宮をらうじ奉りて、懷を更に放たずもてあつかひ。人やりならず衣も皆濡らして、脱ぎかへがちなめる。かろしく、など斯く渡し奉り給ふ。此方に渡り。てこそ見奉り給はめ」と宣へば、明石上「いと、たて思ひぐまなき御事かな。女に、おはしまさむ。だに、あなたにて見奉り給はむこそよく侍らめ。まして男は、限りなしと聞えさすれど、心やすく覺え給ふを、たはぶれにても、かやうに隔てがましき事なさかし。がり聞えさせ給ひそ」と聞え給ふ。打笑ひて、源「御中どもにまかせて、見放ち聞ゆべきななりな。隔隠し立てして今は皆が私を除け者にして餘計なお世話など仰しやるのは効てて今は誰もくさし放ち、さかいらなど宣ふこそをさなけれ。まづはかやうに這ひ隠れて、つ

心恥かしげなる 氣づまりを感じずる程取りすました様子を、ありつる箱も さつき文箱も、慌てて隠すのも見苦しいから、其儘にしてある。それはどうした箱でその箱ぞ

今めかしく 若返りなきつたら、しい御心持が癖になつて、何か課の分らない御冗談を時々仰しやいます。

ものあはれなりける 明石上が何か沈みこんでゐる様子が目立つて見えるので。明石の岩屋から、内々行つて居つた御祈禱の巻数やまだ果さない願などのありましたのを、源氏にもお知らせ申上げておく方がよからうと申して送つて来たのでございませう。巻数 願主の依頼によつて讀誦した巻や陀羅尼等の名目や度付を書いて願主に送り届ける書ついでなくて何かは 只今は箱をお開けになる機會ではござりませぬ。

世の中によしある 奥ゆかしい方面の人或ははたらきのある方につけても、現世に執着してゐるといふ點は認められぬが、才智も限りがあつて入道にはかなはない。さも至り深く いかにも悟つてはゐるが、而も風情のあつた人です。聖だち 聖者ぶつたり俗界を離れたやうな顔はしなかつたもの、内心はすつかりあつた世に住してゐるやうに見えた。

かやすき身ならば 私を手輕な身分ならそつと逢つて見たいものだ。

年の積りに 年を取つて何かと世間の事が分つてゆくにつれて、入道の人が妙に戀しく思ひ出されるから、まして夫婦の間柄では、どんなに感慨も深からう。

いってゐるやうだ、れなくいひおとし給ふめりかし」とて、御几帳を引きやり給へれば、母屋の柱に寄りかかりて、いと清げに、心恥かしげなるさまして物し給ふ。ありつる箱も、惑ひ隠さむもさまあしければ、さておはするを、源「などの箱ぞ。深き心あらむ。懸想人の、長歌よみてふんじこめたる心地こそすれ」と宣へば、明石上「あなを仰しやう。今めかしくなり返らせ給ふめる御心ならひに、聞き知らぬやうなる御すさびごとどもこそ時々出でくれ」とて、ほほゑみ給へれど、ものあはれなりける御氣色どもしるければ、怪しとうちかたぶき給へるさまなれば、煩はしくて、明石上「かの明石の岩屋より、忍びてはべりし御祈りの巻数、又まだしき願などの侍りけるを、源氏にも知らせ奉るべき折あらば御覽じおくべきや」とて侍るを、「只今は、ついでなくて何かはあけさせ給はむ」と聞え給ふに、源氏「けにあはれなるべき有様ぞかしとおぼして、源氏「いかに行ひまして住み給ひにたらむ。命長くて、ここ

だから罪障も多く消滅した事だらう、らの年比勤むる罪もこよなからむかし。世の中によしあるさかしき方々の人として見るにも、この世にそみたる程の濁り深きにやあらむ、かしてき方こそあれ、いと限りありつつ及ばざりけりや。さも至り深く、さすがに氣色ありし人の有様かな。聖だちこの世離れがほにもあらぬものから、下の心は、皆あらぬ世に通ひ住みわたるところ見えしか。まして今は心苦しきほどしもなく、思ひ離れにたらむをや。かやすき身ならば、忍びていと逢はまほしくこそ」と宣ふ。明石上「今はかの侍りし所をも捨てて、鳥の音聞えぬ山にとなむ聞き侍る」と聞ゆれば、源「さらばその遺言ななりな。消息は通はし給ふや。尼君いかに思ひ給ふらむ。親子の中よりも、又さるさまの契りは殊にこそ添ふべけれ」とて、源氏「涙ぐみ給へり。源氏自身「年の積りに、世の中の有様を、とかく思ひ知りゆくまゝに、怪しく戀しく思ひ出でらるる人の御有様なれば、深き契りの中らひは、いかにあはれならむ」な

さじうみ 正身。本人。當人。

すこしもてつけ 女三宮も少しは身を嗜むやうになられた。げにこそ成程完全な女といふ静やかなるを。紫上は静かといふことを本領として目立たないやうにしてみられるが、それであてなく、人もひねくれたやうな所はなく、人もひねくれたやうなぬやうなく、品位を失はすことをお忘れにならない方だと。わが御北の方も以下なほ夕霧の心中。わが妻雲居雁も情愛は深い人が、しづかりとした、人だ、手に入れた才覚などないと思ふと、美しさをかうして、此處に集まつてみられる婦人達も、ひそかに愛着の念が起ると、心ひそかに愛着の念が起ると、あるのふと、源氏は格別寵愛もなからず、世間の手前だけの愛であるのだ。

いはけたる御遊びたはぶれに心入れたる童べの有様など、院はいと目につかず見給ふ事どもあれど、一つさまに世の中をおぼし宣はぬ御本性なれば、斯かる方をもまかせて、さこそはあらまほしからめと御覽じ許しつつ、誠め整へさせ給はず。さうじは身の持方をよく教訓されるので、みみの御有様ばかりをば、いとよく教へ聞え給ふに、すこしもてつけ給へり。かやうの事を、大將の君も、げにこそありがたき世なりけれ、紫の御用意気色の、こころの年経ぬれど、ともかくも漏り出で見え聞えたる所なく、静やかなるを本として、さすがに心うつくしう、人をも消たず、身をもやんごとなく心にくくもてなし添へ給へる事と、見し面影も忘れがたくのみなむ思ひ出でられける。わが御北の方も、あはれとおぼす方こそ深けれ、いふかひあり、すぐれたるらうくじさなど、物し給はぬ人なり、あたしきものに今はと目馴るるに、心ゆるびて、なほ斯くさまに、つどひ給へる御有様どもの、とりくにをか

見奉り知るに 源氏の様子を夕霧が見知つては、おほけなき 女三宮に逢はうなどいふ不料簡。

さまの御定め 女三宮の御縁談について誰はどうか、彼はかうとそれ、評定のあつた頃から宮に懸想し、院もけしからぬ申し分だと思つていらつしやらないと聞いてゐたの。その折より、あの當時から懇意の様子を聞く事をせめてものは、かたい慰めと居つた。女三宮もや、対の上の御けはひ、女三宮もや、なる。紫上には歴されておいでに、忝くとも、畏れ多い申しやうです。私ならそんな物思ひはお、身分に不相應な私ではあります。

しきを、心一つに思ひ離れがたきを、ましてこの宮は、人の御程を思ふにも、限りなく心殊なる御程に、取り分きたる御気色にしもあらず、人目のかざりばかりこそ、と見奉り知るに、わざとほけなき心にしもあらねど、見奉る折ありなむやと、ゆかしく思ひ聞え給ひけり。衛門のかんの君も、院に常に参り、親しくさぶらひ馴れ給ひし人なれば、この宮を父御門のかしづきあがめ奉り給ひし御心おきてなど、委しく見奉りおきて、さまの御定めありし頃ほひより聞え寄り、院にもめさましてはおぼし宣はせずと聞きしを、斯くことさまになり給へるは、いと口惜しく胸痛き心地すれば、なほえ思ひ離れず。その折より語らひつきにける女房のたよりに、御有様なども聞き傳ふるを、慰めに思ふぞはかなかりける。「對の上の御けはひには、なほ歴され給ひてなむ」と世の人もまねび傳ふるを聞きては、「忝くとも、さる物は思はせ奉

まさくさまよく 蹴鞠はあま
り體裁よくもないし静かでもな
い騒がしい無作法な遊びのやう
だが、それも場所がら人がらに
よるものであつた。
斯くはかなき、こんなつまらぬ
遊戯ではあるが、互に巧拙の技
倆を競つて我劣らじと思つてお
るらしい顔付である中に。

御階の間 寢殿の南面の階段の
ある間。

人々花の上も 人々が花の事も
忘れて鞠に熱中してゐるさまを
源氏も女三宮も隅の勾欄まで出
て眺めてゐられる。

上臈も亂れて 高官の方々もあ
まり一生懸命に蹴たので冠の額
が少し弛んだ。

櫻 櫻襲は表白に裏赤花。

中のしな 中段の邊に腰をおろ
された。

櫻はよきて 伊行釋「吹く風よ
心しあらばこの春の櫻はよきて
散らさざらなむ」

例の殊に 例の如くこんな場合
だからとて格別とりすましても
ない女房達がゐる色々の衣裳の
こぼれ出てゐる透影など
端々や簾越しに見える透影など
は、
幣袋 昔旅ゆく人は色々の布
帛を小さく切つて袋の中に入れて
おき、道々の道祖神に奉つて旅
の平安を祈つた。幣袋に響へた
のは雑然として規律立たないと
いふ意。

猫はまだよく 人の唐猫はまだ
十分に人に馴れないのか長い網
を物につけておいたのだが、その
逃げようとして引合つてゐる拍
子に、
御簾のそば 女三宮の居られる
御簾の片端が。

ぬ亂れごとなめれど、所がら人がらなりけり。故ある庭の木立
の、いたく霞みこめたるに、色々のひもとときわたる花の木ども、
僅に芽を出した柳
わづかなる萌黄の蔭に、蹴鞠の事 斯くはかなき事なれど、よきあしきけ
ぢめあるを、挑みつつ、我も劣らじと思ひがほなるなかに、柏木 衛
門の督の假初に立ちまじり給へる足もとに、並ぶ人なかりけり。
柏木の様子は
かたちいと清げになまめきたるさましたる人の、用意いたくし
てさすがに亂りがはしき、をかしく見ゆ。御階の間に當れる櫻
の蔭によりて、人々、花の上も忘れて心鞠にに入れたるを、源氏も女三宮 おとど
も宮も、隅のかららんに出でて御覽ず。巧みな手際もあらはれつつ番敷が進むにつれて
も見えて、かず多くなりゆくに、じやうらふ 上臈も亂れて、冠 かうぶりの額
すこしくつろぎたり。夕霧 大將の君も、大將といふ身分を考へると今日はいつも落着いてゐる人で 御位の程思ふこそ例ならぬ
亂りがはしさかなと覺ゆれ、外観は人より一層若く美しく 見る目は人よりけに若くをかしげ
にて、少し細氣の失せたのを著て 櫻の直衣のややなえたるに、さしぬき 指貫の裾つがた、すこしふ
くみて、指貫を 氣色ばかり引きあげ給へり。かるくしくも見えず。

夕霧のさま
物清げなる打解姿に、花の雪のやうに降りかかれば、夕霧が相を うち見あ
げて、しをれたる枝すこし押し折りて、御階の中のしなの程に
居給ひぬ。柏木も かの君續きて、柏木 花亂りがはしく散るめりや。櫻
はよきてこそ」など宣ひつつ、女三宮 宮のお前の方を尻目に見れば、
例の殊にをさまらぬけはひどもして、女房達の衣のつま いろくこぼれ出でたる
御簾のつまく透影など、片隅に引寄せて 春の手向の幣袋にやと覺ゆ。御几帳
どもしどけなく引きやりつつ、女房達も近々に居るし人間味があるやうに思はれて居る所へ 人げ近く世づきてぞ見ゆるに、
唐猫のいと小さくをかしげなるを、すこし大きな猫の追ひ續
きて、俄に御簾のつまより走り出づるに、女房達は 人々おびえ騒ぎて、
「そよく」とみじろきさまよふけはひども、衣の音なひ、耳か
しましき心地す。猫はまだよく人にもなつかぬにや、綱いと長
く附きたりけるを、物に引掛けまつはれにけるを、逃げむとひ
こしろふ程に、御簾のそば、いとあらはに引きあげられたるを、
とみに引きなほす人もなし。この柱のもとにありつる人々も、女房達

心あわただしげ 皆慌てて居て
こわがつてゐる様子に見える。
階より西の 階の間から西二間
目の東側の所であるから、何の
目を遮る物もなくあらはに見込
む事が出来る。

紅梅 表紅に裏紫。

七八すんばかりぞ 身のたけに
七八寸程餘つてゐる。
御ぞの裾がちに 衣裳が裾の方
に長く餘つてゐて、小さいから
ある。横顔は、何ともいへない
髪のかかりたる 髪は垂れ下つ
てゐる。横顔は、何ともいへない
程上品にかはいらしい。
いと飽かず 女三宮をはつきり
見る事が出来なくて柏木は物足
らず残念に思つてゐる。

大將いと傍痛けれど 夕霧もそ
れを見付けて笑止な事だと思つ
てゐるが、そつと自分で御簾を
直しに行くのも却つて軽率であ
るから、只それと氣付かせるや
うに咳拂をしたので、
さるはわが心地にも だが夕霧
自身ももう暫く見て居たかつた
のであるが、猫の綱を緩めた爲
に御簾がおりので、我知らず
嘆聲が漏れた。

誰ばかりにかは 今のは誰だつ
たらう、多くの女房達の中で、
一人目立つた桂姿からしても女
三宮に相違ない。女房達は唐衣
に裳をつけてゐるからである。

わりなき心地の 柏木は遺瀨な
い心を慰める爲に例の唐猫を呼
寄せて。

おとど御覽じおこせて 源氏が
夕霧や柏木の方を御覽になり。
上達部の座 上達部であるあな
た方がそんな所にゐられるのは
軽々しい。紫上の居られる東の
對の南の廂の方。

心あわただしげにて、ものおぢしたるけはひどもなり。
几帳の際すこし入りたる程に、桂姿にて立ち給へる人あり。階
より西の二の間の東のそばなれば、紛れ所もなく、あらはに見
入れらる。紅梅にやあらむ、濃き薄きすぎに、あまたかさ
なりたるけちめ花やかに、冊子のつまのやうに見えて、櫻の織
物の細長なるべし。御髪みかみの、裾すそまでけざやかに見ゆるは、糸を
よりかけたるやうに靡きて、
うつくしげにて、七八すん許りぞ餘り給へる。御ぞの裾がちに、
いとほそくささやかにて、姿つき、髪のかかり給へるそば目、
いひ知らずあてにらうたげなり。夕かけなれば、さやかならず、
奥暗き心地するも、いと飽かず口惜し。鞠まじに身を投ぐる若君達
の、花の散るを惜しみもあへぬ氣色どもを見るとき、女房達は御簾が
はを、ふともえ見つけぬなるべし。猫のいたくなければ、見返り
給へる面持もてなしなど、いとおいらかにて、若くうつくしの

人やと、ふと見えたり。大將いと傍痛けれど、這ひ寄らむもな
かくいとかるくしければ、只心を得させて、うちしはぶさ
給へるにぞ、やをら引入り給ふ。さるはわが心地にもいと飽か
ぬ心地し給へど、猫の綱ゆるしつれば、心にもあらず打敷かる。
ましてさばかり心をしめたる衛門の督は、胸つとふたがりて、
誰ばかりにかはあらむ、こころのなかにしるき桂姿よりも、人
に紛るべくもあらざりつる御けはひなど、心にかかりて覺ゆ。
さらぬがほにもてなしたれど、まさに目とどめじや、と大將は
いとほしくおぼさる。わりなき心地の慰めに、猫をまねきよせ
て、かき抱きたれば、いとかうばしくて、らうたげに打鳴くも、
なつかしく思ひよそへらるるぞすきくしきや。
おとど御覽じおこせて、「上達部の座、いとかるくしや。此方
にこそ」とて、對の南面に入り給へれば、皆そなたに參り給ひ
ぬ。宮も居なほり給ひて、御物語し給ふ。次々の殿上人は、簀

圓座 ちんざともいふ。菓菅蒲
等で渦状に編んだ座褥。菓菅蒲
榊餅 折に定まつて饗せ
られる菓子で、餅の粉にあまづ
らをかけて榊の葉で包んだ物。
干物 乾魚。

大將は心知りに、夕霧は事情を
知つてゐるので、さては妙な事
で御簾の間から見えた女三宮の
お姿を柏木が思ひ出してゐるの
いと端近なりつる女三宮が端
近に居られた事を柏木も一方
は軽率な態度と思ふ事であら
う。率な態度も紫上にはあん
な軽率な振舞はるまいに、あ
斯かれはこそ、これだからこそ
世間で考へてゐるよりは源氏の
愛情が薄いのだ。

おほきおとどの 太政大臣がい
つち私を相手にして勝負をなさ
つた中で、鞠にかけては私は逆
もかなはなかつた。のやうな小技
は別な事はあるまいが、上手
の系統は矢張違つたものだ。今
日のあなたと鞠は實にうまいも
のはあつた。方には政務上の
才は劣つてゐるが家風が、
仰しやいますやうに傳はつて行
くものとしましたところ、どの事
もござりますまい。拾遺雜上道眞の母、久
家の風の桂も折るばかり家の風
方も吹かせてしがな。何事でも人
に勝つてゐる事は書き傳へるべ
きもので、あなたに鞠の名手
である事などは系圖に記してお
くのが面白からう。

いとこよなく 迎も近づき難い
我身の程が思ひ知られるので。

子に圓座召して、わざとなく、榊餅、梨、柑子やうのものども、
さまざまに箱の蓋どもに取りまぜつあるを、若き人々そぼれ
取りくふ。さるべき干物ばかりして御酒を召上る。
は、いといたく思ひしめりて、ややもすれば、花の木に目をつ
けて眺めやる。大將は心知りに、怪しかりつる御簾の透影思ひ
出づる事やあらむ、と思ひ給ふ。いと端近なりつる有様を、か
つはかるゝしと思ふらむかし、いでや此方の御有様の、さは
あるまじかめるものを、と思ふに、斯かればこそ世の覺えの程
よりは、うちく御志ぬるきやうにはありけれ、と思ひ合せ
て、なほ内外の用意多からず、いはけなきは、らうたきやうな
れど、うしろめたきやうなりや、と思ひおとさる。宰相の君は、
よろづの罪をもをさく、たどられず、覺えぬ物の隙より、ほの
宮の姿を見たに、自分が以前からこがれてゐた志が達せられるのかと
かにもそれと見奉りつるにも、わが昔よりの志のしるしあるべ
きにやと、契り嬉しき心地して、飽かずのみ覺ゆ。院は昔物語

しいで給ひて、おほきおとどの、よろづの事に立ち並びて、
勝負の定めし給ひしなかに、鞠なむえ及ばずなりにし。ほかな
き事は、傳へあるまじけれど、物の筋は、なほこよなかりけり。
いと目も及ばず、かしこうこそ見えつれ」と宣へば、うちほほ
ゑみて、柏木はかゝしき方にはぬるく侍る家の風の、さしも吹
き傳へ侍らむに、後の世のため、殊なる事なくこそ侍りぬべけ
れ」と申し給へば、いかでか。何事も人に殊なるけぢめをば、
しるし傳ふべきなり。家の傳へなどに、書きとどめ入れたらむ
こそ興はあらめ」など、たはぶれ給ふ御さまの、匂ひやかに清
らなるを見奉るにも、斯かる人にならひて、いかばかりの事に
か心を移す人は物し給はむ、何事につけてか、あはれと見許し
給ふばかりは靡かし聞ゆべき、と思ひめぐらすに、いとこよ
なく御あたり遙かなるべき身の程も思ひ知らるれば、胸のみふ
たがりてまかで給ひぬ。

いまさらに女三宮に御懸想な
まつた所でどうせ叶はぬ戀です
もの、今更に顔色にもお出しな
いますな。「いろ」は櫻の縁語。

と遠筆に
りかに走り書きで、
「いまさら小侍にいろにないでそ山櫻あよばぬ枝に心かけきと
かひなき事を」とあり。

昭和十三年二月十八日印刷
昭和十三年二月廿二日發行

校對 源氏物語新釋 卷の三
定價金貳圓八拾錢

著者 吉澤義則
發行者 下中彌三郎
印刷者 齋藤道太郎
東京市日本橋區吳服橋
東京市日本橋區吳服橋
東京市日本橋區吳服橋

發行所

東京市日本橋區吳服橋
振替東京二九六三九番
株式會社

平凡社

電話日本橋二二二
一一五五五
九八七番番番

24W-73

<p>1907</p> <p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>
<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>
<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>
<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>

...





